

自由論題7

報告テーマ

グローバルバリューチェーン、イノベーションシステム、イノベーション成果：中国携帯電話産業の事例から

Global value chains, innovation systems, and innovation outcome: An evidence from China's mobile phone handset industry

氏名(所属)

日置史郎 (東北大学)
Shiro Hioki(Tohoku University)

要旨(800字程度)

開発途上国の産業発展にとって国際価値連鎖への参入は重要な意義をもつ。途上国企業は、多くが先進国市場に基盤をおく主導企業のガバナンスに組み込まれる一方で、学習を通じた高度化が可能になるなどと論じられてきた。とはいえ学習を持続的成長の源泉である技術進歩、より高度なイノベーションへとつなげていくためには、途上国企業側の能力構築、そしてそれを可能にする各国固有の仕組みが必要となる。このため国際価値連鎖論の最近の研究では、国際価値連鎖と途上国のイノベーションシステムの関連性を問う視点が重要視されるようになってきた。

かくして国際価値連鎖への参入から生じる学習、企業内部の研究開発努力、途上国内部のイノベーションシステムでの学習や知識移転がどのように途上国企業のイノベーションの産出に対して貢献しているのかという問いが重要性を帯びてくる。本研究は、中国携帯電話端末製造企業の調査データを用いて、その特許生産関数を推定した。その際に、企業内部の研究開発努力のみならず、サプライヤーやカスタマーや研究機関などからの学習が与える影響も測定するように工夫し、上の問いに答えることを目指した。

分析の結果、携帯電話企業の特許数は、①企業内部の研究開発努力あるいは企業の所有や組織のありかた(外資系かどうか、重要な製品設計プロセスの分裂ないし統合)、②カスタマーからの学習、③研究機関からの学習が有意な影響を与えており、③サプライヤーからの学習は特許産出の増大には有意な影響を与えていないことがわかった。

イノベーション計測の指標として特許データを用いていることから、③の解釈については慎重でなくてはならないが、本研究の結果は、全体としてみれば、上位中所得国から高所得国への階段を登ろうとする中国のような途上国の産業高度化を考察しようとするとき、国際価値連鎖という単一の分析枠組みは有効ではなく、国ないし地域(または部門)のイノベーションシステムの固有な在り方を十分に踏まえる必要があることを示している。